父 吉川英治

吉川英明著

父 吉川英治

吉川英明著

文化出版局

父 吉川英治

検印廃止
昭和四十九年九月一日＊第一刷発行
昭和四十九年十一月一日＊第四刷発行

著者＊吉川英明
発行者＊大沼 淳
発行所＊文化出版局
東京都渋谷区代々木三の二二の一
郵便番号＊一五一
電話＊〇三(三七〇)三一一一(代表)
振替＊東京一九五六七〇番
印刷所＊カバー 文化カラー印刷
本文 大日本法令印刷
製本所＊大口製本

© Eimei Yoshikawa 1974

目次

歳月 7

1 吉野村へ 9

こわい父 やさしい父 19

2 終戦のころ 26

父と競馬 36

3 『新・平家』と末っ子の誕生 46
各社のサムライ達 53
4 私の中学入学 64
父の愛 71
5 軽井沢 76
避暑地の日々 84
6 結婚披露 97
父と母 109
7 吉野村を後に 123
父と酒 130
8 熱海時代 140
煙草 144

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

9 闘病 148
ヨウと理想像 152
10 『新・平家』の完結 169
ゴルフ 177
11 『私本太平記』起稿 187
作家としての父 196
12 最後の家 220
父と妹たち 233
13 昭和三十六年 243
14 昭和三十七年 272
あとがき 292

装幀　杉本健吉

カバー絵は、吉野村の折り梅

父
吉川英治

歳　月

「もう、そんなになりますか。早いものですねー」

今年、父の十三回忌を迎えますというと、人は、申し合わせたようにそう言う。

そうだろう。実際に父と呼び、夫と呼んだ、かけがえのない人を失った私や母でさえ、

「早いわねえ、もう三年ね」

「早いねえ、もう七年になるんだね」

と、折にふれては言い交わしながら、あっという間に過ぎた年月である。

人が聞けば、

「もうそんなに」

と、びっくりするのは当然だと思う。

しかし、どんなに早く感じられようと、決して短くはない十二年という歳月は、我が家を変えた。

父の死の七ヵ月前に結婚し、その花嫁姿で父の涙を誘った妹の曙美には、小学五年生の男の子を頭に、三人の子供がいるし、私も、すでに二人の子持ちである。

当時、まだ大学生だった弟の英穂も、父が晩年、膝の上にのせて可愛がっていた末の香屋子も、ともに、この春結婚した。

五人のお祖母ちゃんとなりながら、同居する家族の少なくなった母は、父が最後に住んだ赤坂の家から、近くのマンションに移った。

たまに、家族全員が寄った時など、父が生きていたら、孫と呼んで目尻に皺をよせたであろう子供達を見たり、今は、母も住んでいない赤坂の家の前を通ったりする時、しみじみと十二年の長さを感じる。

父の臨終の時、まだ黒かった母の髪にも、あの時の悲しみと、それからの淋しさを植え込んだように、白いものが目立ってきた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

1　吉野村へ

私は、昭和十三年、父が四十六歳の時の子である。

このころ、父はすでに、『鳴門秘帖』、『親鸞』などで、作家として世に出、「朝日新聞」に、『宮本武蔵』を執筆していた。

家は、赤坂表町にあった。

私は、この家で、五歳の春までを過ごしたのだが、家の間取りや庭の景色、一しょに遊んだ友達の姿などまで、ある所は、かなり鮮明に覚えているのに、この家での父の姿はまったく記憶にない。記憶の中に映像化出来ない。不思議なくらい空白なのである。『宮本武蔵』を終えた後、父は、『三国志』、『新書大閤記』、『梅里先生行状記』などを同時に執筆中で、食事も机の上で済ますほどの忙しさだったから、いたずら盛りの私が、父と顔を合わせる時間は、ごく少なかったの

かも知れない。
しかし、母に聞けば、仕事の合い間には、父の膝で、菓子も食べていれば、オシッコもひっかけている。机の上の原稿用紙や文鎮をいたずらして、叱られてもいるし、旅行にもついていっている。
母のそんな話を聞いていると、父のイメージとして、「暖かい、柔らかい掌」という感触が、ぼやっと甦り、今も肌に残っているような気もしてくる。
ただ、赤坂の家と父の姿とは、私の頭の中で、映像として決して重ならないのである。

そうした、ぼんやりとした記憶の流れの中に、父が忽然として姿を現わすのは、私達が吉野村の家に引っ越しする日のことである。
昭和十九年の三月、私達一家は、そろそろ危なくなり始めた赤坂の家を捨て、都下西多摩郡の吉野村（現在は青梅市柚木町）に疎開する事になった。
三月にしては、暖かい日だったと思う。
五歳であった私は父と母に連れられて家の門を出ると、父は、
「英明、この家ともお別れだ。さよならを言いなさい」と言った。

吉野村の家には、それまで何度か行った事もあり、吉野へ越すと聞いて喜んでいた私だったが、父にそう言われると、何故か急に悲しくなった。

それでも、今出て来たばかりの門に向かってお辞儀をしたが、頭を下げた途端、なにかがこみ上げて来て、ワンワン泣き出してしまった。

父は、

「泣く奴があるか、みんなそろって吉野へ行くんじゃないか」

と、しゃくり上げている私をたしなめたが、その父の目頭にも、私のと同じものが光っていたのをはっきりと覚えている。もちろん、私はただ、遊びなれた家とお別れだと聞いて泣いたのであり、私の大粒の涙と、父の目頭に宿った光との間には、かけはなれたものがあったのだが、その目を見た時、私はハッとした。同時に父という人にすごく親しみを覚え、甘えたい気持ちになった。

自分の父親に、ことさら親しみを覚えたというのは、変な言い方だが、とにかく、その瞬間、そういう気持ちになったのである。

そして、その日以来、父は、ずっと私の記憶に生きている。

家を捨てたという事と、初めて見た父親の涙が、よほど強烈に子供心に焼きついたに違いない。

＊

吉野村の家は、青梅線の〝二俣尾〟という駅で降りる。

梅の名所として知られる所だが、駅からの途中、〝奥多摩橋〟という橋を渡る。真っ白な石造りの橋で、欄干から下を覗くと、呼吸が止まりそうなはるか下方を、真っ青な水がゆっくりと流れている。多摩川である。

川は、大小の石ころに、ごろごろとおおわれた河原に白く縁どられて、いっそうその青さを際立たせて見える。

子供の私てさえそうだったが、吉野村を訪れる人は皆、この奥多摩橋の上に立つと、何か、自然の霊気といったようなものにうたれるらしい。

父がこの土地に腰を据えてから、訪ねて来る各社の編集者や知人達は、口をそろえて、

「いい橋てすねえ。あの上に来ると、つい立ち止まってしまいますよ」

と、橋とそこからの景色をほめた。

記者の人の中には、

「あんまり素晴しいんで、社の原稿用紙を二、三枚、細かく千切って飛ばしてみました。風にの

っていつまでも落ちないんてす。ああ、気持ち良かった」
という人もいたし、
ひどい人は、
「一度、あそこから、小便してみたいてすね」
などと真顔で言って、
父に、
「オイオイ、あまり川を汚すなよ」
と笑われたりしていた。
戦争末期から戦後にかけての、醜く破壊された都市の残骸の中から、ガタガタの電車に乗ってたどりついた吉野の里で見るその橋のたたずまいは、当時の大人達の心を慰める事、想像以上のものがあったようだ。
吉野村へ移ってからも、父の日常は相変わらずて、一日中、原稿用紙を前に坐り切りの毎日だったが、引っ越して間もなく、風邪をこじらせたのがもとで急性肺炎にかかり、一時は重体に陥った。
私達子供は、父が病気だとは聞かされていたが、そんな危険な状態にあるとはもちろん知らな

かった。

吉野村の家は、昔の庄屋か豪農が住みそうな家で、入り口から、うす暗い土間が広がり、そこから直接、大きな畳敷きの部屋が続いていた。そして、その部屋の真ん中に、これまた大きな囲炉裏がきってあった。囲炉裏の上には、真っ黒にすすけた太い孟宗竹の自在鉤が下がっていて、それが都会から来た私の目には、何とも異様なものに見えた。

病気の父は、その真上の二階に寝ていたが、母をはじめ家中の神経が、ピン、とはりつめていて、二階から聞こえる父のしわぶき一つにも、そのはりつめた糸が敏感に反応するのがよくわかった。

だから私達は、朝食を済ますと、

「家の中で騒いじゃいけませんよ」

という、母や叔母達の声も待たずに表にとび出し、新しく与えられた田舎の自然を満喫するのに忙しかった。

父は、一ヵ月ほどで危機を脱したらしい。「らしい」というほど、私は幼かったのだが、それても、久しぶりに机に坐る父を見て、何かしら、ほっとした安らぎを感じたのを覚えている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com